

1. アルキビアデスの新プラトン主義的解釈(p197-202)

- ・ 前回の講義
時間がなかったので、パレーシアの概念の分析を途中でやめてしまった。
- ・ 寄せられた質問
なぜ、『アルキビアデス』の対話篇を取り上げるのか。
対話篇はプラトン作品の中でそれほど重要性を持っているわけではない。
それなのになぜ、古代哲学の全域にわたる見通しをたてるにあたって、その標柱のようにして取り上げるのか？
→パレーシアと、後のプラトン主義的な注釈者についてお話するかわりに、『アルキビアデス』の新プラトン主義的注釈の問題についてお話したい。
- ・ アルキビアデスの新プラトン主義的解釈
新プラトン主義的が文化・思想・哲学のなかに再登場したとき・・・
プラトンの諸作品の体系化という問題＝作品の校訂の問題が提起される。
→プラトンの作品の中で、同様の形態・順序で作品の版が定められているという問題
- ・ プロクロスとオリュンピオドス
注釈者であり、『アルキビアデス』をプラトンの全作品の最初に位置づけられるべきと論じた人。
- ・ 最初に位置づけた 3 つの理由
 - ① 『アルキビアデス』が 2 人にとってプラトン哲学の要約そのものであったこと
 - ② 哲学的実践の第一条件としての<汝自身を知れ>を哲学のなかに初めて、大々的に導入するものであったこと
 - ③ 2 人がそこに政治的なものとカタルシス的なものの分岐の、最初の現れを見ていたこと
- ・ プロクロスのテキスト
『アルキビアデス』は哲学の原理そのものである。
→興味深いテキスト。ここには絶対にプラトンのではないような、後代導入された区別、ヘレニズム期、帝政期、そして古典古代後期における哲学の教育ないし区別のあり方にぴったりと符合するような区別がみられる。
- ・ そのときに見られる区別
論理的考察、道徳的考察、自然についての教説、神的存在に関する真理の 4 つ
→プロクロスが、これらの 4 要素は全て自己への回帰という、その根本をなすはずのものから発して提示されていると考えていたことを示す。
- ・ オリュンピオドスのテキスト
「・・・というのも、自己自身について無理であるというのは不条理であるからだ。第二に、ソクラテスの教説にはソクラテス的に取り組まなくてはならない。さて、ソクラテスが哲学に向かったのは、「汝自身を知れ」という掟であったと言われている。それに、この対話篇は楼門に似ていると考えなくてはならない。そして楼門が内陣よりも先に来るのとちょうど同じように、『アルキビアデス』は楼門に、『パルメニデス』は内陣にひき比べてみなくてはならない」

→『アルキビアデス』を楼門にたとえ、『パルメニデス』をプラトン哲学の核心そのものとしている。実践されている「汝自身を知れ」をたんにあらゆる哲学的な知の基本とするばかりではなく、哲学せんと欲する者の実践のモデルそのものとしている。

→自己認識というかたちをとった、自己にたいして行われる働きかけという対価を払ってはじめて、人は哲学的知のなかに歩み入ることができる。

↓

この考えは、フォーコーが論じた第3の要素と関係している。

- ・ 政治的なものとカタルシス的なものとの間の区別、という問題

オリュンピオドスのテキスト②

「(略)・・・魂にしたがって自己自身を知ることなのだから。この魂は植物的な魂でも非理性的な魂でもなく。理性的な魂である。そしてこの魂にしたがって自己を知るということは、もちろんわれわれが、カタルシス的、観照的、神学的、降神術的な仕方ならぬ、政治的な仕方では振る舞う限りにおいての自己を知るということである」

オリュンピオドスのテキスト③

『アルキビアデス』で、われわれは魂であり、この魂は理性的であるということがひとたびわかったとすると、[今度は]政治的な徳とカタルシス的な徳とを首尾よく達成しなくてはならない・・・(略)。」

→『アルキビアデス』の伝統の歴史全体にとって、大変重要な点がある。

- ・ 重要な点

「汝自身を知れ」を原則として立てている『アルキビアデス』のなかに、2つの「汝自身を知れ」の大きな差異化の萌芽が見られること

① 政治的なものという要素(=個人が然るべき市民となり、あるいはふさわしい統治者となることを可能にするようないくつかの原理、規制を導入するものとしての「汝自身を知れ」)

② [カタルシス的な]操作に訴えるような「汝自身を知れ」

※主体はいくつかの操作によって自らを浄化しなければならず、それによってその固有の性質において神的な要素と接触し、自身のうちに神的な要素を認めることができるようになる必要がある。

→『アルキビアデス』は、この2つの分岐の根本にある。

【政治的】 【分岐点】 【カタルシス的】

『ゴルギアス』←『アルキビアデス』→『ファイドン』

2. 2つの「汝自身を知れ」(p202-207)

- ・ 哲学の根本そのものとしての「汝自身を知れ」

新プラトン主義では、自己への配慮が自己認識の形式へ吸収される

① すぐれて自己への配慮の形式であるようなものとしての「汝自身を知れ」の特権がある

② 「汝自身を知れ」が政治への導入となる

③ 「汝自身を知れ」がカタルシス的なものへの導入となる

④ 政治的なものとカタルシス的なものとの間にいくつかの問題が提起される

- ・ プラトン主義と、新プラトン主義

プラトン・・・カタルシス的な手続きと政治的なものとの道の間には、違いはない。同一視。

新プラトン主義・・・これら2つが切り離される。どちらかを選ばなければならないような分岐。

- ・ 最初の講義の復習

対話篇・・・アルキビアデスが自分自身に配慮するべきであるということを示すことが問題だった

アルキビアデス…都市にとって何が善か、市民の親愛が何に存するか知らなかった。都市を統治するため、同胞に然るべく配慮することが必要だった。

=他者へ配慮することができるようになるために、自分自身に配慮しなければならなかった。

→正義に配慮しようと誓う。

=魂の内的な階層、彼の魂のさまざまな部分の間を支配する秩序と従属関係に配慮することを意味する。

→自己への配慮は、一貫して、他者たちへの配慮のための道具的役割を持つものだった。

=自己認識は、「自己へ配慮せよ」という一般的な命令、一形式でしかない。

- ・ 新プラトン主義における配慮

カタルシス的なものと政治的なものの差異化はない。

同じ手続きが同時にカタルシス的であり政治的。

自己へ配慮することと、他者たちへ配慮することの間…目的というつながりがある。

→他者たちに配慮できるようになるために私自身に配慮する。私は私自身にたいして、新プラトン派の人々の言うところのカタルシス[浄化]を実践する。そして私がこの、カタルシスの技法を実践するのは、まさに政治的な主体となるためなのだ。

- ・ 政治的な主体

政治のなんたるかを知っており、したがって統治することができるような主体

- ・ プラトンにみられた、3つのやり方

①目的のつながり

②相互性のつながり

→都市の救済のなかに、自己への配慮はその報いを、その担保を見出すことになる。ひとは、都市が自らを救い、そして彼が自己へ配慮することによって都市が自らを救うことを可能にした限りにおいて、自己自身を救う。

③本質的含意のつながり…自分の存在と自分の知を同時に発見する。

↓この3つのつながりが、1~2世紀になると…

- ・ 1~2世紀にみられた変化

①配慮の対象となる自己…自己は、自己への配慮の最終的な目標となる。

=ただ自己のうちにのみ、つまり、自己にたいして行われる活動そのもののなかにのみ、その到達を、その達成を、その充足を見出す活動となった。

=自己を、自己自身のために配慮する(自己の、自己による自己目的化)。

⇔プラトン

都市や他者などに対して開かれていた自己への配慮

3. カタルシス的と呼んだものと、政治的と呼んだものの乖離(p207-209)

- ・ 重要な現象といえる理由

①哲学そのものにとって、この現象が重要だったということ

生存の技法と自己の技法が次第に同一視されるようになった過程=個人としてあるべきかたちで、市民としてあるべきかたちで生きることを可能してくれるような知とはどんなものだろうかという問題が、哲学の分野で重要視されるようになった過程

→哲学の霊性への吸収

②カタルシスのテーマが大きくなっていること

回心=立ち返り(メタノイア)という問題の登場と展開

生の技法が、真理に到達することができるようになるために自分の自我をどのように変容させればよいのだろうかという問題を中心として展開されるようになる

→修練の生活、修道院的な生活が真の哲学となり、修道院が真の哲学学校となる。

↓

自己の配慮における自己の自己目的化が、たんに哲学のなかでの影響だけを持つものではなかった。

4. 自己の陶冶(p209-215)

- ・ ヘレニズムとローマ以降

自己の陶冶の一大展開が見られるようになる

- ・ 陶冶を語れる条件

①相互に最小限の調整がとれた、最小限の上下関係、階層関係が成立している価値の総体があるとき

②それらの価値が普遍的なものであると同時に、一部の人々にしか到達可能ではないものとして与えられていること

③個人がこれらの価値に到達するためには、いくつかの明確に規定された振る舞いが必要であること

④これらの価値への到達が、程度の差こそあれ、細かく定められた手続きや技術によって条件付けられていること

→考え抜かれた技法と、一つの知を構成するような諸要素の全体をとおしてのみなし得るものであるということ、このことを陶冶と呼ぶ。

→ヘレニズムおよびローマの時期以降、自己の陶冶が発展した。

- ・ 自己の陶冶

救済という考え方

プラトンでは特別な強い術語的意味を持っていない。しかし、適用領域や価値と構造が異なってきている。

(1)二元的なシステム

(2)常に劇的な出来事と結びつく

(3)二つの項をもつ操作(罪-救済)

- ・ 救済という語

ギリシア語の意味

①迫りくる危険から解放する

②守る、保護する、あるものの周りに保護をめぐらして、それが元の状態に維持されるようにする

③恥じらいや名誉、思い出を保存して守る

④その人に向けられた告発からその人を逃れさせる、無実を証明する

⑤元の状態のまま維持されている

⑥ためになることをする、安定を保証し、何かの、誰かの、あるいは集団の良い状態を確保する

↓

自己自身を救う、とは、その意味に関していえば、けっして何か、生存を死から生へ、可死性から不死性へ、悪から善へ減刑してくれるような出来事といったものに還元されるものではなく、危険から自らを救うということだけが問題なのではない。

→(ギリシア語の)救済は、はるかにもっと広い意味を持っている。

- ・ 自己自身を救うという語

否定的な意味だけではなく、肯定的な意味も持つ。

魂や人が適切な仕方で武装し、必要な場合には自らを実際に守ることができるような仕方で装備するとき、

彼は自らを救うことになる。

=自らを救う人とは、警戒し抵抗している状態にある人、自己を統御し、自己に君臨している状態にある人

=自己自身に対して幸福や、静けさ、平穏といったものを保証する。

・ 救済

ヘレニズムやローマのテキストのなかに出てくるが、この概念には死や不死性、他の世界といったものの参照は見られない。

→ひとは劇的な出来事その他の操作媒体との関わりで自らを救うのではない。自らを救うのは、生涯を通して行われる活動。

=自らを救うことが、目標でもあり、目的でもある。

→救済によってひとは、不幸や心の乱れ、つまり偶発事や外的な出来事などによって魂のなかに誘発されるあらゆるものにとって、到達不能な存在となる。

↓つまり…

救済とは、自己自身のうちに閉じこもってしまうような自己への関係の、意識的、持続的かつ完成した形式。

ヘレニズム・ローマ的な救済において、自己は救済の動作主であり、対象であり、道具でもあり、目的である。

⇔都市にとって媒介される救済とは正反対。

5. 次回扱うこと(p216)

- ・ 自己の救済がどのようにして、こうした全般的なテーゼにもかかわらず、ヘレニズムおよびローマの思想において他者たちの救済の問題と結びつくことになったのかを論じていく。

6. H松のコメント

- ・ プラトンの時代の「自己への配慮」は、他者・共同体への貢献といった他人や社会を前提とするもので、民生や公共性にも繋がる概念だが、ヘレニズム・ローマ的な「自己への配慮」はものすごく利己的で、社会とのつながりは自分の報酬とは別問題！と割り切ってしまう概念だなど思う一方、全員が自分の欲に忠実に従いつける(自己に配慮し続ける)ことなんてできるのだろうかと考えさせられてしまった。